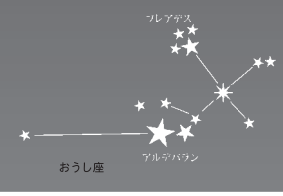
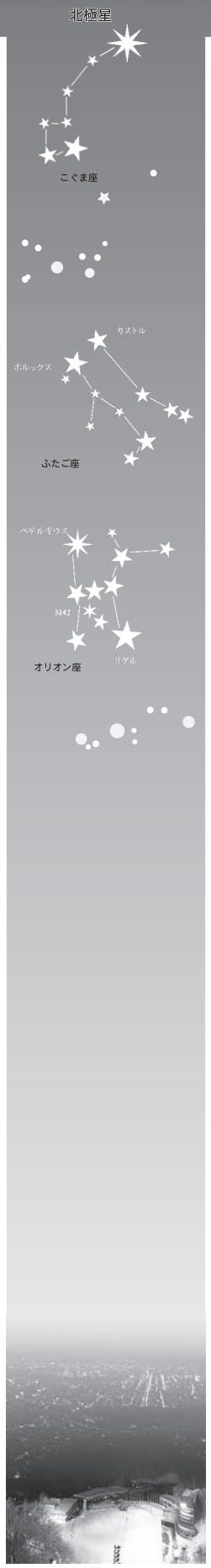


ー医師会長エッセイー

ポラリスを仰ぐ北の大地から



100年前のインフルエンザ

紋別医師会 会長　小林　正司

連日、新型コロナウイルス感染症の報道が多く、いささか過剰ではないかと感じ始めている昨今である。2006年２月初版の速水　融氏による「日本を襲ったスペイン・インフルエンザ」を入手し読んでみた。1918年から1920年に世界中で少なくとも2,000万人、多く見積もれば4,500万人の人命を奪った。原因がH１N１型と判明したのは1990年代になってからとのこと。日本では、1918年10月からの「前流行」と1919年12月からの「後流行」と当時呼んでいた。「後流行」は罹患率は低いが死亡率は高かった。

「北海タイムス」紙では、1918年10月29日、30日付で、旭川、札幌、函館の流行を伝え、またたく間に全道に拡大。1919年５月の終息までに全国で26万６千人、全道で１万２千人の死亡者、公式統計の罹患者数2,116万人以上が「前流行」。「後流行」は1919年９月中旬の熊本県が始まりとされている。最初の報道は、「福岡日日新聞」1919年12月13日付。北海道では1919年暮から札幌、釧路、岩見沢、岩内、十勝から患者発生報告。札幌は1920年元日から27日間で死亡209人（21歳～30歳が最多で65人）。２月上旬には後志、北見、宗谷地方でも発生し、全道が巻き込まれた。特徴は低罹患率と高死亡率であった。1920年５月には全国的に終息した。

日本のスペイン・インフルエンザには「前流行」と「後流行」の２つの山があり、死亡のピークは1918年11月の月間13万人、1920年１月が月間８万人と衝撃的なものであった。この大流行に対し行政の指導、対策としては、室内・身体の清潔、人混みを避けること、うがい、患者の隔離、マスク着用等で日本では劇場、映画館等の閉鎖は行われなかった。

一方、歴史教育としても高校日本史の教科書には一行の記述もなかった（調べたのは一冊のみだが）。講談社発行の「日本全史」（1927頁の厚い本）をひもといてみても1918年（大正７年）の頁に一行「スペイン風邪が世界的に大流行」。1919年（大正８年）の頁に「前年からのスペイン風邪による死者は約15万人」と簡単に書かれているのみで、1920年の頁では何も記述無しであった。1920年には、第１回国税調査があり人口5,596万人。「前流行」「後流行」合わせて死者数は約45万人と推計されている。現在、世界ではまだ収束しつつあるとは言えない新型コロナウイルス感染症の一日も早い終息を願っている。

マスク

遠軽医師会 会長　田中　　実

未だに収束が見えないCOVID-19。本年２月に道内での発症者が報告された頃は、町外からの有症状患者さんと接する時に注意を払えばよいと楽観的に考えていた。ところが４月に入り型違いのウイルスがあれよあれよという間に全道に拡散し、ついには地元でも感染者が報告され、同時に住民の危機意識が急激に高まり来院患者さんの多くがマスクを着けるようになった。

これまで「健康人がマスクを着用するのは無駄遣い」と言っていたが、このウイルスに関しては感染した覚えもなく無症状でも周囲に拡散する可能性が自分にもあるわけで、さすがにマスクを着けざるを得なくなった。手術室以外ではほとんど着けたことがなかったので、マスク越しの外来診察が意外にストレスが多いことに気がついた（マスクどころかゴーグルや防護服まで着用し体を張って治療にあたっている先生方には敬意を表したい）。

挨拶した時の患者さんの表情を体調のバロメーターとしているため、目だけだと分かりにくい場合はマスクを外してもらう手間が必要となった。逆に医師の前でマスクを着けるのは失礼だと考える患者さんもいて、マスクをずらして「先生がマスクをするなんてやっぱり怖いウイルスだね」などと話し出すので、「マスクは外さなくてもいいよ」の余分な一言も増えた。

高齢で耳の遠い患者さんが多く、普段から身振り手振りを交え大声で会話している（らしい）が、マスク越しでは声がこもり、話す表情や口の動きが隠れるため言葉がより理解しにくいようで、さらに大きな声での反復が必要となった。大声で話し続けるのはなかなか疲れるし、マスクもずれ気味となり、特に質の悪いものだと顔が痒くなるなど、自分にとっては全く良いことがない。今はお互いマスクを外して、普通の音量？で診療できる日をただただ心待ちにしている。